日本遺産
JAPAN HERITAGE

令和３年度中部公民館歴史散策講座（2021.10.19）
日本遺産「里沼(SATO-NUMA)」構成文化財追加認定

㊶長良神社と館林城下町の総構え

館林の里沼

【長良神社と館林城下町の総構え　ストーリー】

「守りの沼」城沼を要害とした館林城下町の西北端に鎮座し、周囲には総構えの土塁と堀を利用した水路が残り、その水は城沼に流入する。長良神社は中世から館林とその周辺に広く分布し、祭神藤原長良が水辺に棲む大蛇を退治した伝説を持つ。中世・近世の館林地域の沼辺の開発と城下町建設につながる「里沼」の歴史を伝えている。

【長良神社の歴史】

館林市内には代官町や野辺町、赤生田本町など 11 か所に長良神社があり、邑楽郡全体では約 40 社（長柄神社を含む）存在し、館林・邑楽郡内の特色ある神社となっている。平安時代初期、都の有力貴族であった藤原長良を祀っており、その子基経は最初の関白となった。長良神社がこの地域に多いのは、平安時代末期に館林・邑楽郡内で力を持った佐貫氏が藤原長良とつながる藤原秀郷の子孫とされ、佐貫荘の開発が無事に進むように、また一族の繁栄を願って祀ったためといわれている。長良神社は利根川と谷田川沿いに多く、利根川に住む大蛇を退治して村の娘を守ったという伝説があり、水辺の守り神にもなっている。

代官町の長良神社は、中世に瀬戸井（邑楽郡千代田町）の長良神社から勧請され、江戸時代は館林城下町の北西部に鎮座していた。明治６年（1873）に郷社となり、明治 43 年には城下町の各町内にあった多くの神社を合祀した。旧暦 10 月 19 日・20 日には恵比寿講祭が行われる。また、本紺屋町にあった織姫神社が境内社となっている。

【館林城下町の総構え】

館林城は 15 世紀に赤井氏によって築城され、天正 18 年（1590）に徳川家康の関東入国に伴って、徳川四天王の一人榊原康政が館林城主となり、城郭・城下町の整備を行った。「館林紀」によると、町囲の城普請は、文禄２年（1593）２月 11 日より各村から人足が出て堀を掘って土手を築き、文禄４年 11 月までに町囲いが完成したとある。町全体を堀と土塁で囲む形態を「総構え」と呼び、小田原城など全国の主要城郭に用いられている。城下町には５か所の出入口（江戸口・佐野口など）を設け、町内の周縁部には寺社を配置し、防衛上の整備を行った。代官町の長良神社は、町の北西角に位置し、現在も土塁と堀（現在は水路）が残されている。堀の水は城沼に流れ込み、「守りの沼」が城下町全体を守っていたことを知ることができる。

長良神社北の土塁と堀（水路）